

詩編35 - 41編の編集史について
——Hossfeld-Zenger 説の検討——

飯 謙

Summary

On the Redactional Process of Pss.35–41

II KEN

I have criticized the hypothesis of the redactional process of Pss.3–14, set up by Frank–Lothar Hossfeld and Erich Zenger (*AKC* 44/1, 1997). In this paper, I also have examined their hypothesis of the redactional process of another Psalmsgroup, Pss.35–41. They presented it in their thesis “Selig, wer auf die Armen achtet’ (Ps.41 : 2) Beobachtungen zur Gottesvolk–Theologie des ersten Davidpsalters”, *JBTh* 7 (1992).

I have pointed out that they show too much of an interest in the surface structure of the text, such as words and expressions occurring repeatedly in the Psalmsgroup, but very little in the underlying structure or the cohesion of the text. For instance, the synonymous words *jhl* and *qwh*, used as chain motifs in Pss.37–39, should receive more attention from the synchronical aspect. In my view, these function as key–words in the context of the Psalmsgroup.

I take notice of *dal*, a general term of the weak, in Ps.41 : 2, in the final psalm of the first Davidpsalter (Dp). This is the only example in the first Dp. It occurs only one time in the second Dp, too, in Ps.72 : 13, namely in the final psalm of the second Dp. I have regarded it as an intentional usage by the redactors of Dp. Though Hossfeld and Zenger have supposed the redactors as the poor (*ny*, *nw*), I have suggested them as the lower Levite priests, who had to work in hard circumstances, and so could sympathize with the weak in the community, such as the heathens, sinners, and also poor people. That is why the redactors used *dal*, in the broad sense, not *ny* or *nw*, in the end of the Dps. In the first Dp, the priestly redactors had aimed to emphasize the righteousness of *JHWH*, who “makes his sun rise on the evil and on the good, and sends rain on the righteous and on the unrighteous.”

0. はじめに

旧約詩編 (der Psalter) が、第二神殿で用いられた詩編 (ein Psalm) を無意図的に収集したのではなく、各作品をすぐれて入念に配列した編集体であるということは、いまや定着した認識になりつつあると言える¹⁾。この理念の提唱者である F.-L. Hossfeld と E. Zenger は、第一ダビデ詩編が、詩編 3-14編, 15-24編, 25-34編, 35-41編に分けられると主張した²⁾。われわれはすでに旧約詩編中のいくつかの編集体について検討を加えたが³⁾、本稿では、Hossfeld と Zenger による第一ダビデ詩編最終の集合体である詩編35-41編についての見解を考察し、さらにこの詩編集合に対するわれわれの理解を深めたい。

Hossfeld と Zenger は旧約詩編の編集段階を、1) 捕囚前、2) 捕囚期、3) 捕囚後、4) ヘレニズム期の四段階に区分して考察する⁴⁾。彼らは詩編テキストの内容を、文献批判的な仕方では整理し、抽出される諸断片を、1) ~ 4) の各時代に振り分ける手順を取るわけである。彼らは、いまわれわれが考察をしようとしている詩編35-41編の成立過程を、次のように想定した。

- 1) 捕囚前：35編 1-6, 11-18節, 38編 1-13, 15-19, 22-23節, 41編 5-11節
- 2) 捕囚期：35編 19-25節, 38編 20-21節, 36編, 41編 12-13節
- 3) 捕囚後：35編 7-10, 26-28節, 37編, 38編 14節, 39編, 40編 12-18節, 41編 2-4節

彼らはこの集合体について、いわゆる「貧者の神学」を含む詩編35編と41編とを外枠とするインクルージオを想定する。彼らの見るところ、その外枠と中心のいわば核 (Kern) となる作品 (詩35, 38, 41編) には捕囚前の基層があった。そして、編集者がそれらを現在のスタイルへと校訂、加筆していったのである。彼らによれば、これら基層の形態は、冒頭の嘆願 (35: 1-4 / 38: 2 / 41: 5), 苦難の描写 (35: 11-16 / 38: 3-21 / 41: 6-10), 結びの嘆願 (35: 15 / 38: 22-23 / 41: 11) と共通している。その他モチーフの点でも、詩人に対する敵の勝利 (35: 15 / 38: 17 / 41: 8), 詩人に対する敵の嘲弄 (35: 16 / 38: 17 / 41: 10), 応報の図式 (35: 12 / 41: 11) などが共有されている。以下、彼らのテキスト分析を検証して行きたい⁵⁾。

1. 核となる作品の編集史

1.1. 詩編35編 Hossfeld によれば、この詩編の基層は 1-6, 11-18節である。まず彼は、9-10, 18, 28節に見られる「讃えの約束」に目を向け、通例ならば、これが詩編35編を三連に分割する指標となると言う (1-10, 11-18, 19-28節)。しかし彼は、それらの「約束」を語る者の差異を指摘する。すなわち、9-10節で詩人は、自身を「貧しい者 (*'nĕj*)、乏しい者 (*'bjwn*)」と認識しているのに対して、18節では共同体における自らの立場に言及することなく公的礼拝

における一般的な讃美を、また28節は私的な讃美を語っている。彼はこれが、詩編35編の内的な差異を暗示すると見る。

そこで彼は、各連の作者像を探求する。1－4節は、ヤハウェに「盾、胸当て、槍」をもって戦いへ出かけるよう要請する。こういった擬人法的なヤハウェ叙述の仕方は、例えば詩編5編13節など、捕囚前の戦争を想起させ、かつ祈り手が王であることを推測させる古い作品に見られる。また5－6節は、「ヤハウェの使い」の働きによって敵が受ける運命を述べる。「ヤハウェの使い」が民を約束の地に導くというモチーフは、捕囚前的・前申命記的な伝承に見られるので、彼らはこれが王の祈りにふさわしいと考えた⁶⁾。加えてこの中間的存在である「使い」は、1－4節における擬人法的な表現を引き継ぎ、テキストのずれを緩和する効果がある。

次の11－18節は、1－6節が戦争を暗示するのに対して、裁判という全く異なる情景で語られたテキストである。しかし Hossfeld は、1節以下の戦いの状況が、この裁判での戦いに拡張されたと言う。加えて彼は、この語り口が捕囚前の作品である詩編7、22、38編と共通すると指摘する。例えば、基層の終結部である17－18節は、詩編22編20－23節と構造や語彙、文体の点で関連すると述べるのである。

Hossfeld は、詩編35編1－6、11－18節の基層に対して、捕囚期、19－25節の断片が付加されたと見る。19節の「偽りの私の敵たちが、私のことで喜ぶことはありませんように」に始まるこの付加文は、15節の「私の挫折のとき、彼らは喜び、集まった」を展開したものである。この断片は、19節と24節における請願、21節と25節における発言の引用がそれぞれ対応し、枠を造っている。この断片で言及される敵対者の発言の宛先は形態上、20節の「地の穏やかな者たちに対して」(*l rgj-’rš*)である。21節では、その敵が同じ前置詞で、「わたしに対して」(*qj*)語っている。この並行は詩人が「地の穏やかな人々」の一員であることを意味する。Hossfeld は、この表現が12、15節（基層）に描かれた詩人の孤立というモチーフに反するゆえ、それを含む段落（19－25節）を基層から外したのである。

さらに Hossfeld は、7－10、26－28節が、捕囚後に編集された断片であるとする。彼はまず、知恵文学に散見される狩りのイメージで描かれた7節の *hnm* に着目する⁷⁾。これは Hossfeld が捕囚期の拡張部分と認定した19節にも見られるが、彼は、捕囚後の編集者がこの語を19節から援用したと見る。そしてそれに続く敵対者表象が、7節は複数であるのに対して、8節以下では単数となり、それが10節の貧しき人を保護する陳述における敵対者の単数表現（奪う者=*gzl*）につながる。1－6節までの敵対者表象は複数であったので、挿入部の始まる7節の複数表現は、その移行部分として機能しているとするのである。Hossfeld は、この「貧者の語彙」を含む7－10節を、迷うことなく捕囚後の時期に分類した。また、26－27節は詩編40編16－17節とはほぼ同じであり、Hossfeld はやはりこれも捕囚後の時代に分類した。

1.2. 詩編38編 この詩編は、いわゆる病者の歌である。詩人は、病を自身の罪に対する神からの教訓的な罰と考え、その終結、すなわち癒しを願う。Hossfeld はこの作品について、統一性、類型、大まかな年代決定の三つの側面から問題を設定する。彼の見るところ、2節と

22-23節の嘆願がこの詩編の外枠、3-21節がその理由を綴る主部である。Hossfeld が着目するのは、2, 10, 16, 22節の、「主よ」(ヤハウェもしくはアドーナイ) という呼びかけである。彼はこれを、最終形態の段落区分を導く指標とする(2-9, 10-15, 16-21, 22-23節)。

この構成は、詩編38編がまとまりのある統一体であるとの印象を与える。しかし Hossfeld は、敵の行動に対する反応を記した14-15節を取り上げ、その判断に疑義を呈する。彼によれば、どちらの詩行も内容面では重なるが、14節の「沈黙のモチーフ」は隣接作品の39編2-3, 10節を反映しており、かつそれは出エジプト記4章11節やイザヤ書53章7節など、詩編外テキストに起源をもつ言い回しである。しかし詩編38編15節について Hossfeld は、*jkh* (処決する) の用法が2節と重なることをあげ、当該節が語用論的にも語彙論的にもこの詩編に融合しているとし、14節のみを二次的付加と結論づける。

続いて Hossfeld は、20-21節の敵との対立に目を向ける。これは敵の詩編によく見られる描写であるが、詩編38編においては多少、事情が異なる。すなわち、12-13節や17節では病者に対する連帯の不足が問題になっているのに、20-21節では善意と悪意の対立が問題となっている。つまり、論点がずれている。また敵は12節では詩人の日常的な場に生活する者であるのに対して、20-21節では、明らかに無法者のように振る舞う、より大きな枠組みの「敵」の一員となっている。そして何よりも、12-13節が含む詩行「悪を、善の下で、わたしに完遂する者たち」(*mšlmj r'h tħt twbh*) は、彼が先に後代の挿入と評価した詩編35編12節と同じである。そこで彼は、38編20-21節も二次的な付加であるとする。

それゆえ Hossfeld によれば、詩編38編の基層は1-13, 15-19, 22-23節ということになる。ここには敵対者に対する批判や呪いはなく、ただ重病に苦しむ人の悲痛な罪告白だけがある。それは知恵文学的な応報思想に彩られているが、しかし罪に対する強烈な悔改の念や快癒の儀式への言及はない。それゆえ、Hossfeld はこの基層を捕囚前に年代づけするのである。

1.3. 詩編41編 Hossfeld が見るところ、第一ダビデ詩編を締めくくるこの作品には、互いに性質を異にする部品が集められている。彼は1節の表題文と14節の頌栄を除く作品本体を、2-4, 5-11, 12-13節に段落区分する。最初の2-4節は勧告的な導入で、ヤハウェが主に三人称で語られる。続く5-11節は、敵に苦しめられる嘆きの現実を述べているが、ヤハウェに二人称で語りかけるテキストを含む。最終の12-13節は、感謝の歌の要素を取り入れた、救済の嘆願である。Hossfeld はこの分析にあたり、a) 2節の祝福の詞がテキストのどこまでを範疇に収めるか、b) 5節「わたしは語った」(*'nj 'mrtj*) に始まる引用部分が、どこまで続いているのか——つまり、どこまで「わたし」が語っているのか、という問いを立てた。

a) これは、2節b-4節で神による守護を受ける「彼」(マソラ・テキストでは動詞の接尾辞に記される。下記試訳の波線部) とは具体的に誰であるのかを探求する問いである。すなわち、テキストからは二つの解釈が可能となる。一つは、2節aで祝福の対象となっている「弱い人に学ぶ者」(*mškil l-dl*) と解する立場であり、多くの注解や翻訳はこれを採用している。いま一つは、2節aを読者にあてた表題文ととり、「彼」をすべて「弱い人」と解する立場

である。この場合、5節以下の「わたし」は、5節bの「癒してください」や9節「彼は床についた」から導かれるように、病のうちにある「弱い人」ということになる。

41: 2 幸いあれ、弱い人 (*dal*) に、学ぶ者に⁸⁾。

禍いの日に、ヤハウエは彼をお救いくださる。

- 3 ヤハウエが、この地で、彼を守り、生かし、幸いにしてくさる、
彼は彼を与えない、彼の敵の魂の中に。

- 4 ヤハウエが、病の床の上で、彼をお支えくださる、
患いのうちにある、彼の寝台のすべてを、あなたは転じられました！

*動詞は、2b-4aが未完形、4bは完了形。

Hossfeld は、重ねて双方の理解が可能であると断りつつ、後者が妥当だと言う。それは詩編40編18節「わたしは貧しく、乏しい」からの連続を前提とする。すなわち彼は、そのテキストの願う神の速やかな救いが、41編2節b以下で、確信として語られていると見るのである。したがって Hossfeld は、2-4節を、40編18節と組み合わせるために挿入されたテキストと考えたのである。

b) この問いについて、彼は11節までであるとする。まず一つには、5節と11節が単語レベルの枠を構成していることをあげる（「ヤハウエよ、わたしを憐れんでください」*Jhwh hnnj*）。これは直前の40編14節と18節の枠にも見られた。次に彼は、「立ち上がる」(*qwm*)という動詞を巡る9節と11節の関係を指摘する。9節で敵対者が詩人の病を見て、「彼はもう立ち上られ (*qwm*) ない」と述べたことに対して、11節で詩人は「わたしを立ち上がらせて (*qwm*) ください」と願っている。さらに11節の詩人が語る「彼ら」は、言うまでもなく6-9節の敵を指す。以上から Hossfeld は、11節が5節以下の文脈に属すると言う。

5-13節は、しかしながら、例えば手元の邦訳聖書では、ひとまとまりのテキストとして読むことができる。むしろ内容から見ると、5-10節が嘆き、11-13節が祈願であり、こちらの段落設定の方がふさわしいとさえ思える。だが Hossfeld は、12節冒頭の「そのことによって (*bz't*)、わたしは知った (完了形)」を取り上げて、反論する。ここに書かれた「そのこと」は、一般的な聖書翻訳を見ると11節の願いの実現を意味すると思われるが、「知った」と完了形で書くからには、すでに完了した出来事を前提とすることになる⁹⁾。しかしそれはテキストに明示されていない。Hossfeld は、この11節と12節の間に、詩編12編6節のような祭司的託宣が隠されていると考える。つまり詩編40編の編集者は、祭司的託宣に導入されるテキストを、12-13節のために借用してきたと言うのである。

その他に彼は、敵対者表象の相違も指摘する。すなわち、敵は6節で複数であるが、12節では単数で表現されている。また、罪認識の問題もその材料となる。詩人は5節で自身の罪を自覚し、その赦しを乞うているが、13節では自身を「全き者」(*tm*)と称している。これらのず

れもまた、12-13節を5節以下のテキストから切り離す根拠となる。

それゆえ Hossfeld は、詩編41編の基層が5b-11節であったとする。それは捕囚前の病者の祈りであった。そこに捕囚期に12-13節を付加し、ヤハウェが被迫害者の側に立つという信仰を示す。捕囚後、さらに2-4節を前置し、救済の対象を貧しき者と同定する、貧者の神学のモチーフが加えられたと言うのである。

1.4. 詩編35, 38, 41編の基層の共通性 では、Hossfeld と Zenger が抽出した基層には、いかなる関連性が認められるのであろうか。彼らは第一に、すべて嘆願の詩編であることをあげる。すなわち、詩編35編は冤罪による被被害者の、38編と41編とは病者のそれである。したがって構成も自ずと重なりを示す。それぞれの作品においては、始まりと終わりに記された神への呼びかけを伴う嘆願（35：1, 17/38：2, 22-23/41：5, 11）が、中心にある苦難の描写を枠づけている。第二は敵対者表象である。敵対者は詩人に勝利を収め（35：15/38：17）、詩人に対して何事か思い謀る（38：13/41：8）。第三は、報復の主題が役割を果たしている点（35：12/41：11）。そして彼らは第四番目に、服喪のイメージをあげる（35：14/38：7）。しかしながら、彼らの主張にもかかわらず、厳密な意味で共通しているのは第一の点だけであると言うべきであろう。

2. 捕囚期の作品と編集

Hossfeld と Zenger は、捕囚前の作品として詩編35編1-6, 11-18節, 38編1-13, 15-19, 22-23節, 41編5-11節を抽出した。彼らの理解では、この三つの断片を組み合わせる作業から、新しい詩編編集体（詩35-41編）が構成されたわけである。この過程で大きな役割を果たしたのが、詩編36編の創作であった。

2.1. 詩編36編 Hossfeld は詩編36編を、2-5, 6-10, 11-13節に段落分けする。第一段落は罪人の態度、第二段落はヤハウェの言葉を含む讃歌、第三段落は結びの嘆願を記している。彼は、第一段落と第二段落の世界観は対立しているが、第三段落がそれに決着をつけると言う。つまり、義人の共同体がヤハウェの慈しみを（11節）、悪しき者が処罰を受ける（13節）。

Hossfeld はこの詩編の分析にあたり、13節と作品全体の関係に目を向ける。すなわち、冒頭の2節「咎が、悪しき者に言う、わたしの心の近くで／神への恐れなどない、彼の目の真向かいには」と最終の13節「そこで、災いをなす者たちは、倒れた／彼らはうち倒され、立ち上がることはできない」が、それぞれ罪人の現状と結末を述べる対応関係にあると指摘する。また同じく13節aの「災い」(*wn*)は、4-5節から採られている。そして、彼が見るところ、13節最初の「そこで」(*šm*)は場所、より具体的には聖所を指し、6-10節の神殿の神学と結びついている。さらにその内容は、12節における悪しき者からの助けを訴える嘆願を受けたものである。そこで Hossfeld は、13節が全体を総括していると言う。

また彼は作品の前半に、単語の特徴的な使用法を指摘する。一つは同一語の連鎖的な用法で、

「目」(2-3節),「善」(4-5節),「災い」(4-5節),「人」(7-8節),「慈しみ」(6, 8節)をあげている。その他,「義」と「公平」(7節),「川」と「泉」(9-10節),「生命」と「光」(10節)も類概念としてこのリストに加えることが許されよう。いま一つは,対極的な用語法である。それは「心」と「目」(2節),「善」と「悪」(4-5節),「人」と「獣」(7節),「山々」と「淵」(7節),「足」と「手」(12節)である。彼は,この中に知恵の伝統が働いており,それらの創作法が特定個人の観察によるものだと見る。そうして彼は,この詩編が一人の作者による統一作品であると結論づけるのである。

次に彼は,この詩編36編と彼らが捕囚期の作品と見る詩編14編の基層(14:1-5)との関連を指摘する。

- a) 悪しき者がその「心に語る」言葉の引用による導入 14:1/36:2
- b) 悪しき者の行為(善を行わない) 14:4/36:4-5
- c) 場の指示詞(*šm*)と罪人の恐れへの言及を伴う終結部 14:5/36:13

Hossfeld は,詩編36編において神殿の神学が強調されていたことに注意を促した。彼は指摘しなかったが,詩編14編の終結句も,シオンからの救いを嘆願する言葉である。Hossfeld と Zenger は詩編36編を,詩編14章6節と同じく,捕囚前から捕囚期に編纂され,この位置に配された作品と考えたのである。

2.2. 捕囚前作品への加筆 Hossfeld と Zenger は,詩編36編2-5節が隣接する35編の基層(1-6, 11-18節)と結合される際,敵対者表象が考慮されたと見る。それを含め,彼らが双方に認めるモチーフの重なりは,以下の通りである。

- a) 敵が災いを思い謀る(*hšb*) 35:4, 20/36:5
- b) 敵の道の滑りやすさ(*hlq*) 35:6/36:3
- c) 欺き(*mrmh*)が敵の思考と発言を決定 35:20/36:4
- d) ヤハウエが敵をうち倒す(*dhh*) 35:5/36:13
- e) 神の義 35:24/36:7
- f) 共同体内セクトへの言及 35:20/36:11

これらの中で,要素a), c), e), f)の詩編35編側には,彼らが捕囚期の挿入部と認定したテキストが含まれている(19-25節)。この挿入が,各作品間における表現上のつながりを生みだし,詩編35編と36編とを,連続する作品として性格づけたのである。特に彼らが強調するのは,要素f)である。ここに暗示される共同体内の対立が,この時期を特徴づけると言うのである¹⁰⁾。

さらに Hossfeld と Zenger は,詩編36編と後続の38, 41編との間にも関連性を確認する。

- g) 陰謀 36:13/38:13/41:8
- h) 憎しみについての陳述 36:3/38:20/41:8
- i) 善と悪の対置 36:5/38:20/41:6, 8
- j) 罪とその脅威についての自覚 36:2-5/38:4-6, 19/41:5

このうちの詩編38編のテキストには、上記した詩編35編のケースと同じく、基層だけでなく、捕囚期の挿入部（20-21節）も含まれている。この個所には、基層にはなかった敵対者に対する辛辣な批判が記されており、やはり共同体内の対立を浮き上がらせる。この対立のイメージは、Hossfeldらが捕囚期の挿入部とした41編12-13節にも反映されている。このテキストは上の表のf)に記されるべき内容を有している。これらのことから彼らは、捕囚期における編集が詩編36編を、35編と38、41編の間に配置したと考えたのである。

HossfeldとZengerによれば、この時期の作業が、迫害や権利の危機、病気などさまざまな困難の最中にある詩人の作品（詩編35、38、41編の基層）を、挿入文（35：19-24、38：20-21、41：12-13）によって結び合わせた。さらにそこに詩編36編を組み込むことにより、罪についての認識を強め、危険が敵からのみ到来するわけではないことに注意を促す。しかし同時に、詩人の基本的な善性は、明確に確認しておく（35：11-12、19、36：11、38：20-21、41：13）。このような善悪の対置によって、この編集の典型とも言える、集団意識が形成される。これらの基層において詩人は、敵に対して個々に対応していた。しかしこの編集においては「地の穏やかな者たち」（35：20）、「ヤハウエを知る者たち」「心の真っ直ぐな者たち」（36：11）が、対立集団に対抗するセクトとして提示される。そして詩人もそのセクトに属する。このセクトは善の実現のために勞し、まさにヤハウエは彼らの側に立つ。もはや敵対者は詩人に対して優位を確保することはできない（41：12-13）。なお、これらのテキストにおいて、神殿との関連は、詩編36編でわずかにふれられるにとどまっている（8-9節）¹¹⁾。

3. 捕囚後の作品と編集

HossfeldとZengerは、捕囚後の時代に、詩35編7-10、26-28節、37編、39編、40編12-18節、41編2-4節が編纂され、詩編の文脈に配されたと言う。彼らが展開する旧約詩編編集史の大きな特徴は、この時期に「貧者の神学」の観点から、テキストに手が加えられたとすることにある。

3.1. 詩編37、39編とその隣接作品 Zengerは、アルファベット歌である詩編37編が、直前の詩編36編が終結部に記した「ヤハウエを知る者たち」や「心の真っ直ぐな者たち」という知恵的な語彙と関連づけられていると見る。さらに彼は、詩編36編の記す「悪しき者」への批判（4-5、12節）への回答が、この詩編の9-10、14-15、39-40節で展開していると言う。そのような連続性の中で、詩編37編は書き出されている。

Zengerは、この詩編と箴言24章1-22節とを比べ、双方の巻頭と巻末がほぼ同じであることに注意を促す（詩37：1と箴24：1、詩37：37-38と箴24：20）。彼は、前者が後者からヒントを得ており、この詩編の出発点には、因果応報思想という、ヨブの友人たちに代表される教えがあると言う。そこでZengerはこの作品を、前5世紀に年代づけるのである。

彼は、この詩編における行の長さの違いから、14節b「貧しい人と乏しい人を倒すために、道の真っ直ぐな人を屠るために」と25節b「その子孫がパンを乞う」を後代の挿入と見なす。

Zenger は、編集者がこれによって「貧者の神学」を補強したと言う。また11節には「貧者の語彙」が見られる。そこから彼は、この作品が捕囚後に「貧者の編集」を受け、詩編35-41編の編集体に組み入れられたと考えた。

詩編37編と38編の結びつきはそれほど強くない。共通するのは、神名(37:13/38:10, 16, 22-23)と神を待ち望む(*jhl*)という告白(37:7/38:16), 神が詩人を見捨て(*zb*)ないという叙述(37:28, 33/38:22), 救済の祈願(37:39-40/38:23)である。

詩編39編は38編と同じ「病者の歌」である。Hossfeld はこの詩編が、詩編49, 90編やヨブ記、コヘレトの言葉と同じく、捕囚後の知恵の伝統を引くものと見る。詩人が、病の原因を自身の罪に求め(9, 11-12節), 周囲の人(敵)も同様に考えている(9節b)からである。このような病理解は、詩編38編にも共通していると言ってよい。これら二つの作品に認められる一致点は、痛みを伴う病(39:3/38:15), 体内の描写(39:4/38:9, 11), 病を神よりの打撃と解し(39:11/38:12), 神の教育的な罰と捉える(39:12/38:2-6)ことである。その他にも、詩人の独白(39:2/38:17)や神を待ち望む(*jhl*)という告白(38:16/39:8)もその中に数えられることができよう。この最後の要素は、詩編37編にも観察された(7節)。また Hossfeld は、詩人の沈黙を語る詩編38編14節の加筆が、冒頭でやはり詩人の沈黙を語る詩編39編の後続を可能としたと見る。

この病者の歌は、13節以下の「神による聴取」の請願によって締めくくられる。Hossfeld と Zenger は、40編2節の「彼(神)はわたしの叫びを聞かれた」がその請願に対応していると言う。そうして詩編40編が導入される。Hossfeld と Zenger は、詩編40-41編の編纂が、この時期の編集で最も重要な役割を果たしたと言う。

3.2. 詩編40編 Zenger は、人称表現の交替や内容から、この詩編を2-5, 6-11, 12-18節に区分する。すなわち、2-5節は神を三人称で描き、死の脅威からの救いに対する感謝、6-11節は神を二人称で語り、ヤハウェの導きを証する生涯への誓い、12-18節はやはり神を二人称で語り、悪と災いゆえの嘆きとそこからの救いを述べている。この感謝から嘆き、そして願いと続く異例な流れは、この作品が完成へと至る複雑な過程を物語っていると言える。

さてこの詩編には、14-18節が詩編70編とほぼ同じであることから察せられるように、異なる発言の状況が観察される。少なくとも詩編70編は独立した作品として伝承されているのであるから、詩編40編14-18節をこの作品独自のテキストと見なすことはできない。Zenger は、14-18節について二重の方向から考えるべきであると言う。一つは12-13節からの直接的なつながりの中で、いま一つは6-11節との鍵語による関連からである。このように、14-18節は他の二つの段落とそれぞれ関わりをもつ。しかしそれら二つの段落は、言語的にも神学的にも著しく異なるので、同一の起源をもつとは言い難い。そこで彼はこの詩編40編の上記した三段落が個別の時期に編纂されたと見るのである。

Zenger は、詩編40編の基層が、2-3, 4c-5節にある「感謝の詩編」であると言う。彼は、その詩編のモチベーションがエレミヤの伝記やイザヤ書50章4-9節および52章13節-

53章13節の「主の僕の歌」第三、第四歌にあると見る。そして5節の「祝福の詞」は、前587年の悲劇に直面した人々への言葉であるとする。

Zenger は、その後の付加である40編6－11節の9節「あなたの律法を、わたしの腑のうちに」には、神殿や記述律法に相対する意識があり、さらにエレミヤによる「新しい契約」の響きがあると言う。7節には「あなた（神）は供え物を望まない」というホセアやアモスを彷彿とさせる言葉があるが、Zenger は、このような表現がもはや燔祭をもたない祭儀を行う、神殿祭司の階級的な権威に対抗するグループに発するものだと見る。

そうして、捕囚後の編集における40編12－18節の付加が、この作品を「貧しく(*nj*), 乏しい(*'bjwn*)」者の詩編にした。Zenger らはこれを「集団意識」から出るものと解する。この人々は、神が「民の苦しみをつぶさに見、……叫び声を聞き、その痛みを知る」というあの伝承の中を生きている（出3：7）。この付加が、詩編40編と41編との連続性を生み出す仕掛けとなったのである。

3.3. 詩編41編と35編 上記したように、詩編40編の感謝から嘆きという展開は、詩編にほとんど例のないものである。しかし Hossfeld らは、これが詩編41編2－4節が加筆、完成され、双方の詩編が結びつけられることによって、次のようなインクルージオを構成すると説明する。彼らはこれが、一回的な出来事ではなく、「貧者の共同体」の実存的な解明を問題にするテキストとなると述べる。

- A. 感謝 (40：2－11)
- B. 嘆き (40：12－18)
- C. 教え (41：2－4)
- B'. 嘆き (41：5－11)
- A'. 感謝 (41：12－13)

詩編40編と41編は、祝福の詞（40：5／41：2）を含む段落に始まる。そしてそれぞれの捕囚後の挿入部である40編12－18節と41編2－4節は、いずれも「災い」(*r'h*=40：15／41：2)と「救い」(*pl't*=40：18／*ml't*=41：2)という語を共有し、神による苦難からの救済を強調している。

また詩編35編は7－10節と26－28節を挿入されることにより、「貧者の詩編」として性格づけられていく。そしてやはり貧者の詩編である34編と結びつけられる。二つの詩編には、捕囚後の加筆以前に「ヤハウェの使い」(*ml'k Jhw'h*=34：8／35：27)という用語上の重なりがあった。そのゆえに双方の結合が意図されたとも考えられるが、編集者は詩編編集体の境界としてより円滑な移行面を準備するため、詩編35編に加筆を行ったのである。Hossfeld と Zenger は詩編35編加筆部に関わる双方の共通項を、次のように指摘する。

- a) 貧しい者を救う神 34：5：18：20／35：10

- b) 貧しい者による恒常的 (*tmjd*) な讃美 34: 2 / 35: 27
- c) 貧しい者の集団が喜ぶ (*smh*) 34: 3 / 35: 27
- d) 「貧しい者」(*nj*) という自称 34: 7 / 35: 10
- e) 「義」(*sdq*) であるとの自己理解 34: 16, 20 / 35: 27
- f) 「ヤハウエの僕」という自己理解 34: 23 / 35: 27
- g) 貧しい者が恥を受け (*hpr*) ない 34: 6 / 35: 26
- h) 「骨」の救済 34: 21 / 35: 10

このようにして Hossfeld と Zenger は、詩編35-41編の編集体が、上述した過程で編纂され、別の編集体である詩編25-34編の後に配置されたことを説明した。彼らはその作業の動機づけを、先行する詩編25-34編が示唆した「貧者の神学」のメッセージをさらに展開するところにあったと言うのである。

4. 結 語

以前の論考でも批判したように、Hossfeld と Zenger の分析には、語彙の重なる指摘と、それらの鍵語を自身の立てた成立過程のモデルに割り振ることとに重点を置きすぎるきらいがある¹²⁾。この仕方によるならば、彼らの観点からの連続性は確かめられはするであろうが、各作品の共時的な結束性を検証することは十分にできない。しかし80年代末、詩編研究に文脈重視の方向が導入された要因の一つは、当時定着しつつあった共時的な文芸学的方法の台頭にあった。それは旧約テキスト編集上の特質に沿った理論である¹³⁾。それゆえ、この観点の欠落は、新しい詩編研究の意義そのものを骨抜きにする危険をはらんでいると言わねばならない。

例えば、詩編35-41編の中心にあたる37-39編には、「ヤハウエを待ち望む」というモチーフが見られる。これは「ヤハウエに逃れる」(*hsh*) と並んで第一ダビデ詩編の最終編集体に用いられる主要概念であり、詩編40編を導入している。筆者の考えるところ、このような鍵語は、より強調されるべきなのではないか。

なるほど、「貧者の神学」が詩編テキストで重要な役割を果たしていることは、間違いない。しかし、旧約詩編の編集者が、神殿の神学を脱して「貧者の神学」に向かったとしても、普遍的な神の義を語る彼らが、その狭いセクトを擁護するような「貧者の神学」ととどまったであろうか。ここで取り上げた編集体に登場する「ヤハウエを知る者たち」や「心の真っ直ぐな者たち」(36: 11)、あるいは「ヤハウエへと逃れ」「ヤハウエを待ち望む」人々は、むしろヤハウエの守護の対象を「貧しき者」に限定しようとする動きへの反対命題として位置づけられるのではないか。それゆえにこそ、第一ダビデ詩編最終の詩編41編で、旧約詩編の編集者たちは、A. Rahlfs がセクト名と考えた *nj* (貧しき者) や *nw* (へりくだる者) をあえて使わず、*dal* (弱い者) という広範な概念をもつ語を用いたのではないか (Hossfeld と Zenger が主張するように、旧約詩編の編集者に、詩編を「貧者」のための作品と性格づける意図があったならば、最終の作品では、*dal* ではなく、*nj* や *nw* を散りばめるのが自然と考える)。筆者はすでに、Hossfeld と Zenger による詩編3-14編の編集史を論評した以前の論文で、第一ダビデ詩編における第一

の構成体である詩編3-7編では「敵に迫害される者」、詩編9/10-14編では「貧しき者」、第二の構成体である詩編15-24編では「異邦人」、第三の構成体である詩編25-34編では「罪人」という具合に、ヤハウエに受容される対象が多面的に描かれていることを指摘した。それゆえ、詩編35-41編における「貧しき者」も、「具体的に苦しむ者」を表す語彙の一つとして、「異邦人」や「罪人」と同列に相対化される必要がある。

注

- 1) N. Fuglister, Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende, in: J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (FzB 60), S.319-384, 1988, S.380; ders., Die Verwendung des Psalters zur Zeit Jesu, BK 47 (1992), S.201-208; N. Lohfink, Der Psalter und die christliche Meditation. Die Bedeutung der Endredaktion für das Verständnis des Psalters, BK 47 (1992), S.195-200; E. Zenger, Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung? in: F.V.Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Fuglister), 1991, S.397-413; F.-L. Hossfeld-E. Zenger, *Die Psalmen I* (NEB) 1993; J. C. McCann (ed.), *The Shape and Shaping of the Psalter* (JSOTS 159), 1993; N. Whybray, *Reading the Psalms as a Book* (JSOTS 222), 1996,などを参照。邦語では、拙論「旧約詩篇の編纂と配列に関する一考察」『オリエンツ』35/2 (1993), 22-38頁, N. ローフィンク「詩編理解にとっての最終編集の意義」WAFS刊行会編『主のすべてにより人は生きる』(1992)所収, 石川立「詩編の様式と編集」木幡・青野編『聖書学の方法と諸問題 (現代聖書講座第2巻)』(1996)所収。
- 2) 総論としては、注1)のE. Zenger, Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung?。詩編3-14, 35-41編については、F.-L. Hossfeld-E. Zenger, "Selig, wer auf die Armen achtet" (Ps 41, 2). Beobachtungen zur Gottesvolk-Theologie des erste Davidpsalters, *JBTh* 7 (1992), S. 21-50。詩編15-24編については、dies., "Wer darf hinaufziehen zum Berg JWHWs?" Zur Redaktionsgeschichte und Theologie der Psalmengruppe 15-24, in: G. Braulik-W. Groß-S. McEvenue (Hg.), *Biblische Theologie und gesellschaftlicher Wandel* (FS Lohfink), 1993, S.166-182。詩編25-34編については、dies., "Vom seinem Thron schaut er nieder auf alle Bewohner der Erde" (Ps. 33, 14) Redaktionsgeschichte und Kompositionskritik der Psalmengruppe 25-34, in: I. Kottsieper u. a. (Hg.), "Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern?" *Studien zur Theologie und Religionsgeschichte* (FS O. Kaiser), 1994, S. 375-388。
- 3) 拙論「統一体としての詩篇15-24篇」『神戸女学院大学論集 (=『論集』)』40/1 (1993), 15-32頁, 同「詩編3-14の編集と構成」『論集』44/1 (1997), 1-12頁。
- 4) 注2)に記したHossfeld-Zenger, *JBTh* 7の論文, S. 49f. を参照。さらに前掲『論集』44/1の拙論, 3-4頁。
- 5) 基本的に、注2)に記したHossfeld-Zenger, *JBTh* 7の論文と、注1)に記した聖書注解叢書 *Die Neue Echter Bibel* 中の彼らの詩編注解を要約するかたちを取った。NEBにおける執筆分担は、Hossfeldが詩編35, 36, 38, 39, 41編, Zengerが詩編37, 40編。この論文の本文中では、これらからの引用に関する注は省略した。
- 6) 出14:19, 23:20, 23, 32:24, 33:2, 民20:16, 士2:1, 4など。
- 7) *hinnām* は、新共同訳聖書では「無実な(わたし)」と形容詞的に訳しているが、一般に「ゆえなく」もしくは「理由なく」と副詞的に訳される。
- 8) ここでは *skl* のヒッフィール形を「学ぶ者」と訳した。*skl* は通例「賢い」と訳される知恵の語

彙。詩41：2についてはLXXが同情を意味する $\acute{o} \sigma\upsilon\nu\acute{\iota}\omega\nu$ と訳したため、これが標準的な訳語となっている。新共同訳の「思いやる」はその典型。ただし、詩41：2の $\acute{s}kl$ は、異例のこととして前置詞 γ を取る（この動詞は前置詞を取らないケースが多い）。この明確な用例は、他にネヘ8：13にしか見あたらず、注解者を悩ましてきた。例えば H. Gunkel, *Die Psalmen*, 1929 (1986⁶), S. 175, はこの扱いに苦慮し、 γ を前置詞と解することを断念して、「神」(エール)と読み換えている。Hossfeld と Zenger は伝統的な読みを採用している。筆者は、ネヘ8：13が前置詞 γ に「律法の言葉」(*dbry htwrh*) を続けていることから、対象(目的語)を深く学ぶことで、「賢くなること」を指すと解釈した。これについては稿を改めて考察したい。

- 9) ヘブル語詩文の完了形は、常に時間を叙するわけではない。むしろ、作者の意志の強さに関わる。関根正雄「古典ヘブライ語動詞表現の本質」『関根正雄著作集』第7巻(1980)所収の217頁以下、拙論「深き淵と錯綜する神名」『論集』37／1(1990), 113-131頁の118-119頁を参照。
- 10) Hossfeld と Zenger は最終的に、セレウコス朝の異邦人とユダヤ人とが連合してイスラエルの秩序を破ったヘレニズム期の対立を想定する。
- 11) この点は先行する詩編構成体である詩25-34編とは対照的である。特に詩26-29編には、神殿の語彙が頻出する。その意味では、第一ダビデ詩編から神殿のモチーフは、徐々に脱落すると言える。
- 12) 注3)に記した『論集』44／1の拙論, 10頁。
- 13) 注1)に記した『オリエント』35／2の拙論, 33-35頁。旧約学における文芸学的方法については、野本真也「旧約学における文芸学的方法の位置」『基督教研究』42／1(1978), 拙論「文芸学的方法——その理念と応用」木幡・青野編『聖書学の方法と諸問題(現代聖書講座第2巻)』(1996)所収, を参照。
- 14) A.Rahlfs, *'Ani und 'Anaw in den Psalmen*, 1892; H. Birkeland, *'Ani und 'Anaw in den Psalmen*, 1933. その他, H.-J. Kraus, *Psalmen* (BK 15/1), 1989⁶, S. 108-111; S.J.L.Croft, *The Identity of the Individual in the Psalms* (JSOTS 44) 1987, pp. 49 ff. を見よ。

※この研究にあたり、1997年度神戸女学院大学研究所研究助成金を受領しました。記して、謝意を表します。

(原稿受理1998年9月25日)